

キャリア形成の計画段階における教育課題の抽出と解決策の検討

畠 一樹 (徳島大学高等教育研究センター・キャリア支援部門)
西條 真結乃 (徳島大学大学院創成科学研究科地域創成専攻)

1. はじめに

本学のキャリア教育(知識習得段階)では、学生が主体的かつ自律的にキャリア形成(知恵修得段階)を実践し、持続的な成長を実現するために行動計画書を作成している。行動計画書を作成する際には、①「何をするか(Do)」という具体的な行動手段を検討するだけでなく、②「何のためにするか(Be)」という行動の目的を明確にすることが重要となる。しかし、作成にあたり、自己理解を深めるための非認知領域の扱いや、経験したことのない社会人以降のビジョン構想などが前提となる。また、学生は正解がない作業において、仮説を立てて行動し、その結果を検証して改善するPDCAサイクルの構築の経験も少ない。このような背景から、学生が授業内容の理解を難しくしていることが懸念される。

本研究では、行動計画書作成の各工程における学生の理解度を調査し、キャリア教育の内容理解をより深め易くするための教育課題を抽出し、その解決策を検討した結果を報告する。

2. 授業の概要

(1) 調査対象とした授業

2024年度前期に開講された科目「キャリアプラン(学部学年:総合科学部2年次、選必区分:選択必須、履修者:123名)を調査対象とした。

(2) 授業概要

本科目では、学生生活で仕事観や人生観を有機的に醸成し、生きがいを持った経験を積み重ねるための行動計画書を作成している。作成においては、学生が自己実現と社会貢献の両立を意識し、主体的かつ自律的な成長を持続的にするセルフマネジメント手法の習得に重点を置いている。

授業内容としては、キャリア教育からキャリア形成までの成長の段階(図1-1)を意識しながら

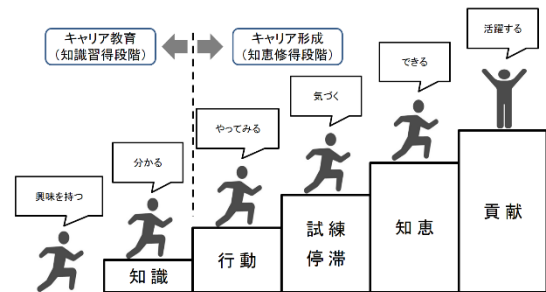


図1-1 成長の階段

表1-1 授業計画

No	講義タイトル	No	講義タイトル
1	ガイダンス	9	キャリア形成の事例を学ぶ(2)
2	キャリア教育の下地をつくる	10	自己理解を深める(1)
3	思考力を養う	11	自己理解を深める(2)
4	時代背景を踏まえる	12	行動計画を作成する
5	社会との関わりを考える	13	問題解決策を考える
6	人間力の必要性を考える	14	経験の必要性を考える
7	企業を取り巻く環境の変化と求められる人材	15	総括授業
8	キャリア形成の事例を学ぶ(1)		

進める。授業の主要な流れは、①社会全体を俯瞰し、自己実現と社会貢献の両立を理解する、②自己理解を深めることによって、自分が大切にしている価値観や信念を感得して言語化する、③その価値観に基づく将来ビジョンを多方面から情報を収集しながら描く、④将来ビジョンを実現するための問題や課題の抽出し、解決に向けた目標を設定する、⑤実践行動に向けたマインドセットを行う、から構成され、それを表1-1に示すような工程に細分化して、行動計画書を完成させる。

その結果、授業終了時点で自分が大切にしている価値観や信念に意味づけされたキャリア形成に対する一連の流れが「行動計画書」に集約され、在学中の有機的なキャリア形成の準備が整う。

(3) 調査方法

本学の学習管理システム manaba のアンケート機能や教務システムのキャリア学習ポートフォリオにあるレポートコメント機能を利用して、各講義の内容に応じた質問に対する回答を得ている。これらの回答から教育課題の抽出に関連する情報を集計した。なお、今回得られたデータは学生の主観的な自己評価によるものである。

3. 教育課題の抽出および解決策の杉

(1) 行動計画書の仕上がり満足度

「行動計画書の仕上がり満足度」と「キャリア形成に向けた積極性」の相関係数が 0.44 と中程度の相関を示したことから、「行動計画書の仕上がり満足度」を向上することがキャリア形成に対して有効であることが確認できた。次に「行動計画書の仕上がり満足度」の調査結果（4件法）では、「満足」「やや満足」が 85.9%を占める一方で、「不満」「やや不満」が 14.1%を占めており、仕上がり満足度を更に向上させるための余地があることが示された。

(2) 行動計画書の作成で難しかった工程

行動計画書の作成において難しさを感じた工程を集計した結果（表 2-1）、各工程で難しいと評価された割合は、各工程で約 10~15%を示した。特に難しいと評価された工程は自己理解で、「何のためにするか（Be）」を表現することが難しかったと考えられる。この段階の個別相談でよく聞かれるのが「なんとなくを言葉にするとしっくりこない」という意見である。このように、意識はできているが具体的に表現する過程で難しさを感じていることが示唆されている。

(3) 「なんとなく」に対する感性と表現力

「なんとなく」に関する調査結果（表 2-2）から、「なんとなく」を感じる難易度について 43.4%が「困難」「やや困難」と回答している。また、「なんとなく」という感覚を言語化する際には、55.6%が「困難」「やや困難」と回答している。この結果から、学生の感性や表現力を向上することが重要な教育課題のひとつと推測される。

この課題の解決策としては、心理療法分野などで、フェルトセンスという曖昧な感覚を感じ取り、それを言語化していくフォーカシングという手法や、「なんとなく」を非言語で表現するアート教育を使って、感性と表現力を強化する教育の導入が効果的であると思われる。

(4) その他の課題

将来ビジョンや想定される試練の設定が難しいことが課題として挙げられる。これらの工程で共通していることは、未経験の領域であり、多様

表2-1 行動計画書の作成で難しかった工程

(複数選択, N=264)

項目	人	%
1. 難しかった点はない	2	0.8
2. 自己理解（人生の目的「Being」を明確化）	39	14.8
3. 将来ビジョン（自己実現）の設定	39	14.8
4. 将来ビジョン（社会貢献）の設定	34	12.9
5. 問題の設定（将来ビジョンと現状のギャップ）	29	11.0
6. 課題の設定（想定される試練・困難）	37	14.0
7. 学生時代の目標の設定	29	11.0
8. 解決手段の設定	26	9.8
9. ステイクホルダー（協力者・伴走者・支援者）の設定	29	11.0

*回答2以降は作成工程順

表2-2 自己理解における感性の鋭敏さと表現力(N=106)

項目	【鋭敏さ】 「なんとなく」を感じる難易度		【表現力】 「なんとなく」を表現する難易度	
	人	%	人	%
1. 容易	10	9.4	12	11.3
2. やや容易	50	47.2	35	33.0
3. やや困難	42	39.6	49	46.2
4. 困難	4	3.8	10	9.4

な情報を収集しながら未来を構想する点である。

この課題に関しては、行動計画書にしたがってPDCA サイクルを実践することで、徐々に解消されると考えられるが、本科目では、未来を構想するためのより充実した情報提供が必要である。また、同様の科目が理工学部でも実施されており、大人数の指導が難題となる。この教育課題の解決策については、キャリア支援室の個別相談など、他機関との連携を強化することで、経験不足による課題の解決策が期待できる。

4. 現状の課題および今後の展望

本研究によって、行動計画書作成における教育課題を抽出し、解決の方向性を把握することができた。今後は、フォーカシングやアート教育による感性や表現力の育成が、教育課題の解決の大きな鍵になる。一方で、教育課題の抽出において調査内容が抽象的であるという課題も残る。今後は、より具体的な課題抽出を行うことで問題の本質にさらに迫りたい。

5. おわりに

ここでは主要な研究成果について報告したが、他の調査結果に対する研究成果もカンファレンス当日にポスターにて報告する予定である。